

# 佐倉城の歴史と堀田氏

元ニューガラスフォーラム財務委員長

吉見 文之

## The history of Sakura Castle and the ruler of Hotta family

Fumiyuki Yoshimi

### 1. はじめに

佐倉市は人口17万人余の都市で、東京駅から電車で約1時間のところにある。市民の大半は昭和40年代以降この地に移り住んだ人たちで、旧城下町地区の人口は3万人程度にすぎない。したがって、多くの市民は俗に言われる千葉都民の感覚を持ち、佐倉市民としての意識は必ずしも高いとは言えない。

ところが最近初期の移住者世代がリタイアして、急に地域に目を向け出した。市もこれに注目して社会人を対象とした「佐倉学」を開講した。佐倉学とは何か。市の教育委員会では次のように説明している。

「佐倉市には印旛沼などの恵まれた自然と原始・古代からの歴史、城下町として培われた文武両面にわたる文化、そして、好學進取の精神に富み優れた業績を残した先覚者がいます。このような佐倉の自然、歴史、文化、ゆかりの人物に学び、将来に生かすことが佐倉学です。」

私が「佐倉学」に入門したのは今から4年前の平成16年1月で、そのときの主テーマは「佐

倉城の歴史」であった。3ヶ月間毎日曜日から晩までみっちり講義を受けたり、史跡を見学したりした。日曜日をすべて拘束されるのは結構厳しかったが、同時に楽しい時間でもあった。これは受講生（1クラス30名）に共通する感じ方であったようだ。

講座修了後、同窓会が結成されたのも自然の成り行きであった。現在私はその代表幹事を任されている。以下は、佐倉学およびその後の同窓会で仲間と一緒に学んだ一端を紹介したもので、先人の調査研究の後追いをしたに過ぎないことをお断りしておく。

### 2. 歴史の街「佐倉」

佐倉市は、教育委員会が言っているように歴史の街である。佐倉城の歴代城主の半数近くが老中を務め、堀田正睦は日米修好に尽力した。

そういえば、平成20年は日米修好150年の記念すべき年である。また、順天堂は、佐藤泰然が蘭医学塾を佐倉に開設したところから始まる。吉見頼寛が初代総裁となった佐倉藩校「成徳書院」は、蘭学が盛んで文武に医学を加えたいわば総合大学としての機能を持っていた。この医学を中心にした蘭学は、「東の佐倉、西の長崎」と言われる程レベルの高いものであった。更に佐藤尚中、依田学海、木村軍太郎、西

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-4-1

TEL 03-3212-8631

FAX 03-3216-3726

E-mail: f.yoshimi@itakyo.or.jp

村茂樹、林薫、津田梅子…等々、数えれば枚挙に暇のない錚々たる人物を輩出した。

このような歴史のある街ではあるが、残念なことにその中心であった佐倉城は、明治になって第2連隊が置かれたことによりその施設の殆どが破壊された。しかし、城跡地内の空堀はその多くが残っており、当時を偲ぶことは十分可能である。現在城跡一帯は城址公園として市民の憩いの場となっている。軍用施設は戦後国立病院として使用されたが、昭和58年現在の国立歴史民族博物館が建築され歴史と文化を学ぶ施設として、修学旅行生など全国から多くの来館者を集めている。

### 3. 本佐倉城から佐倉城へ

現在城址公園として利用されている江戸時代の佐倉城は、徳川政権になってから土井利勝が築城したもので、それ以前つまり中世の佐倉城は、成田市寄りの酒々井町本佐倉と佐倉市大佐

倉を中心とする地域にあった。この城は本佐倉城と呼ばれ、文明年間(1469～1486年)に千葉輔胤の代に築城されたと伝えられている。豊臣秀吉によって北条氏の小田原城が落ちた天正18年(1590年)北条氏の同盟下にあった千葉氏も滅亡し、本佐倉城は関東に入府した徳川氏の支配下に置かれた。城主には当初は徳川の一門が派遣されたが、慶長15年(1610年)土井利勝が任命されると、幕命により鹿島山に新たに佐倉城が築かれることになった。徳川幕府は、佐倉を東方の守りの要として重要視し、幕末まで代々有力譜代大名が配置された。

土井利勝は、元亀4年(1573年)水野信元の三男として生まれ、その後土井利昌の養子になったとされる。家康、秀忠、家光3代の將軍の信望も厚く、利勝が小見川城主から佐倉城主になった時点では禄高3万2千石であったものが、その後老中となり寛永2年(1625年)には14万2千石に増された。この異例な出世

歴代佐倉城主一覽(土井利勝以降)

| 老中 | 城主    | 在任期間                  | 最高禄高    | 前任地   | 転封先   |
|----|-------|-----------------------|---------|-------|-------|
| ○  | 土井利勝  | 1610(慶長15)～1633(寛永10) | 142,000 | 下総小見川 | 下総古河  |
|    | 石川忠総  | 1633(寛永10)～1634(寛永11) | 70,000  | 豊後日田  | 近江膳所  |
|    | 松平家信  | 1635(寛永12)～1638(寛永15) | 40,000  | 摂津高槻  |       |
|    | 松平康信  | 1638(寛永15)～1640(寛永17) | 36,000  |       | 摂津高槻  |
| ○  | 堀田正盛  | 1642(寛永19)～1651(慶安4)  | 110,000 | 信濃松本  |       |
|    | 堀田正信  | 1651(慶安4)～1660(万治3)   | 110,000 |       | 領地没収  |
|    | 松平乗久  | 1661(寛文1)～1678(延宝6)   | 60,000  | 上野館林  | 肥前唐津  |
| ○  | 大久保忠朝 | 1678(延宝6)～1686(貞亨3)   | 93,000  | 肥前唐津  | 相模小田原 |
| ○  | 戸田忠昌  | 1686(貞亨3)～1699(元禄12)  | 71,000  | 武蔵岩槻  |       |
|    | 戸田忠真  | 1699(元禄12)～1701(元禄14) | 67,800  |       | 越後高田  |
| ○  | 稲葉正住  | 1701(元禄14)～1707(宝永4)  | 102,000 | 越後高田  |       |
|    | 稲葉正知  | 1707(宝永4)～1723(享保8)   | 102,000 |       | 山城淀   |
| ○  | 松平乗邑  | 1723(享保8)～1745(延享2)   | 70,000  | 山城淀   |       |
|    | 松平乗佑  | 1745(延享2)～1746(延享3)   | 70,000  |       | 出羽山形  |
| ○  | 堀田正亮  | 1746(延享3)～1761(宝暦11)  | 110,000 | 出羽山形  |       |
|    | 堀田正順  | 1761(宝暦11)～1805(文化2)  | 110,000 |       |       |
|    | 堀田正時  | 1805(文化2)～1811(文化8)   | 110,000 |       |       |
|    | 堀田正愛  | 1811(文化8)～1825(文政8)   | 110,000 |       |       |
| ○  | 堀田正睦  | 1825(文政8)～1859(安政6)   | 110,000 |       |       |
|    | 堀田正倫  | 1859(安政6)～1869(明治2)   | 110,000 |       | 版籍奉還  |

もあって、利勝が家康のご落胤であったとする説もある。利勝は寛永10年(1633年)古河(茨城県)に転封され、さらに大老に上り詰めて行く。利勝から4代後の佐倉城主として、寛永19年(1642年)に堀田正盛(継祖母春日局が乳母を務めた徳川家光に寵愛され、後に家光に殉死)が松本から着任した。禄高は11万石であった。

江戸時代の大名のうち、仙台(伊達家)、加賀(前田家)、薩摩(島津家)などの外様大名は代々その一統に世襲されているが、多くの譜代大名は今で言ういわゆる転勤族であった。実際に佐倉藩では徳川政権下で23代の城主が就任しているが、城主を個々にみると実に12家に及んでいる。100年以上にわたって城主を務めたのは堀田家だけである。

前述の正盛一統の堀田家は、その嫡子正信が乱心のため信州へ流されたが、その86年後の延享3年(1746年)出羽山形から一門の堀田正亮が11万石で入封した。この二つの堀田家を区別するため、便宜上前者を前堀田、後者を後堀田と呼ぶこともある。後堀田家は、幕末まで6代にわたって佐倉藩を統治し、佐倉市民の中では最も身近な存在となっている。

#### 4. 堀田氏について

佐倉城における後堀田の祖となった堀田正亮の前任地山形藩は、関ヶ原の戦いで東軍についた外様大名最上義光の時代には、秋田県の一部も含み57万石の大藩であった。しかし、その後のお家騒動により改易され、以後山形城主には代々譜代大名が就任した。

堀田正亮は、享保16年(1731年)10万石で山形城主を相続し、延享2年(1745年)には老中に就任した。その翌年の延享3年に佐倉に11万石で入封した。このとき、美味しい米どころ山形の領地4万石を佐倉藩の飛び地として幕府から与えられた。そのため年貢米を収受する目的で、山形に佐倉藩の陣屋が設けられた。山形蔵王の山麓近くにある柏倉陣屋である。わ

れわれ佐倉学同窓会は、平成18年7月柏倉陣屋跡を訪れた。そこで柏倉八幡神社結城敏雄宮司からお話を伺った。当時柏倉陣屋には稲荷神社が祭られていたが、現在も堀田永久稲荷神社(写真1)として保存され、結城宮司がお守りをされている。

柏倉陣屋は、堀田正亮が山形から佐倉に転封された翌年、すなわち延享4年(1747年)に設置されたところから始まる。最盛期の陣屋は、南北百余間、東西六十余間の広さで、四方は石垣で囲まれ、現在道路になっているところはお濠であったという。宮司によれば、柏倉陣屋は江戸時代の区画で46か村を支配していたが、山形地方は比較的冷害が軽微であったため、豊かな実りに恵まれていたとのこと。明治22年蔵王山麓の9か村が合併して堀田村となったが、この近くには、蔵王堀田、佐倉宿などの佐倉藩ゆかりの地名がいまでも残っている。

堀田正亮以後幕末まで、堀田氏は代々佐倉城主を務めることになるが、堀田氏の出自について佐倉市史等を参考にして簡単に述べてみる。佐倉市史によれば、「堀田氏は尾張国津島の郷士から出た」とある。市史は更に「その祖は武内宿禰の三十数世後裔である尾張守之高が尾張中島郡に移り住み、この地の堀田村の地名を氏としたという」とつづく。堀田氏は、之高-正泰-正重とつづき、堀田家で最初に佐倉城主になった正盛は、正泰から数えて8代目にあたる。

そこでわが佐倉学同窓会は、平成19年7月愛知県津島市を訪問した。津島神社近くに津島移住後の堀田氏が創建した紫雲山西福寺があり、かつて津島時代の堀田氏菩提寺であった(現在の堀田氏菩提寺は佐倉市の甚大寺-写真2)。本堂には現在も堀田正倫ほか代々の位牌が安置されている。現在のご住職の父君石田秀行氏から西福寺についてのお話を伺った。西福寺は、堀田尾張守正重の第6子彌阿上人が弘長3年(1263年)開基したとされる。現在は浄土宗であるが、当時は時宗として隆盛した。明治



写真1 堀田永久稲荷神社(山形市)

24年(1991年)の濃尾大地震では本堂も倒壊してしまいましたが、堀田氏もその再興を支援し、成田山新勝寺の了解を求めて、西福寺を関西成田山として不動明王の分身を奉持する労をとられた。その痕跡として境内の墓地には「中興堀田之墓(写真3)」と刻まれた墓碑がある。

津島はまた、江戸時代名古屋から伊勢へ行く陸路(別に東海道は熱田から桑名まで海路があった)の要衝であった。われわれは500年の伝統を引き継ぐ尾張津島天王祭宵祭を観光栈敷から見学する機会を得て、往時の津島の情景を思い浮かべることができた。

## 5. おわりに

明治2年版籍奉還により、堀田正倫が最後の佐倉城主となった。この時期の千葉県では佐倉が最大の禄高を有する藩であった。千葉県の県庁が千葉市(当時は未だ一漁村)に置かれた



写真2 甚大寺(佐倉市)



写真3 西福寺(津島市)

のは、房総のほぼ中央に位置するという地理的な条件のほかに、堀田氏が徳川幕府における有力大名であったため新政府が佐倉を遠ざけたことも大きな要因だと言われている。しかし、そのお陰で佐倉市街はいまもなお旧城下町の風情を残している。

正倫の孫、正久氏は佐倉市長を4期務め、正久氏の弟の正祥氏は、後に尾張家20代当主徳川義知の養子となり、徳川義宣と改名、尾張家第21代の家督を継承し最近まで徳川美術館長であった。ただし、正久氏も正祥氏(義宣氏)も今は故人となり、現在はその次の世代に引き継がれている。

## 参考文献

- ・佐倉市史(巻1):佐倉市
- ・ふるさと歴史読本・中世の佐倉:佐倉市
- ・ふるさと歴史読本・近世の佐倉:佐倉市
- ・藩史大事典(第2巻)関東編:雄山閣出版